



公益財団法人

ソーシャルサービス協会だより

2018年
2月18日
事務局発行
No.19

月次決算を軌道に乗せよう
業務月報を定着させよう

◎2017年度4月～12月損益			2月9日現在		
単位(千円)	実績	予算	前年	予算差	前年差
せせらぎ	-792	225	-857	-1,017	65
旭川	-406	26	107	-432	-513
青森	75	-172	30	247	45
仙台	505	255	-33	250	538
塩釜	-2,892	795	-610	-3,687	-2,282
多摩	-5,303	225	-3,280	-5,528	-2,023
IT	-2,436	1,950	4,517	-4,386	-6,953
京都	-9,541	104	2,222	-9,645	-11,763
ワーク	1,147	-596	6,219	1,743	-5,072
田川	-341	-151	1,583	-190	-1,924
福岡	-841	11	-2,509	-852	1,668
宮若	645	142	-13	503	658
都城	-54	-176	724	122	-778
本部	1,130	1,129	-1,951	1	3,081
	-19,104	3,767	6,149	-22,871	-25,253

＜事業所月報＞から

事業所月報をお願いしていますが、12月分は、都城事業所、ITセンター、仙台事業所、田川事業所、塩釜事業所、多摩支所の6事業所でした。1月分は2月21日現在でITセンター、ワークセンター、都城事業所の3事業所です。未だの所は早急をお願いします。

◆都城事業所の報告から

1. 業務遂行状況は、職員がインフルエンザに罹患したが、訪問介護サービス等に影響が出ないよう対策を取った。(宮崎は罹患率が全国で第2位。1位は鹿児島)
2. 予算遂行状況は、1月は新規利用2名受入れたが、同居に伴うサービス終了者が2名、施設入所が1名あり、1名減少した。1月の介護収入は2,172千円で12月よりも204千円減少。年始は家族の帰省等で「休止」が多かったことによる。1月末で当期利益は▲244千円となった。

◆ワークセンターの報告から

1. 業務遂行状況は、ほぼ計画通りの業務遂行が出来ている。ソーシャルホームを4月から「自立支援事業」に移行する準備をすすめている。
2. 予算遂行状況は、ソーシャルホームの減収分を他の部門の人件費の節減で収支の改善をはかっている。収益の予算差▲1,300万円だが、費用が▲1,467万円で+167万円となっている。

◆ITセンターの報告から

1. 業務遂行状況は、職業訓練11月生は1月30日に終了。就職内定は2名。40歳代の就職は厳しい。12月生は12月1日入校し、現在訓練中。
2. 予算遂行状況は、2017年の8月生は就職率が上がらず就労支援費はもらえない。6月開講の就職率が70%となり、就労支援費が決定した。次回の職業訓練へ入札申請中で結果待ちとなっている。
3. その他では、2月14日に本部監事による監査を受ける予定になっている。

2018年2月9日現在で上表のような入力状況です。全体の剰余予算は、上半期で3,767千円が目標でしたが、結果は備考欄のような入力状況で▲19,104千円で予算差▲22,871千円、前年差▲25,253千円でした。但し、今年度は全事業所に本部分担金を計上しています。旭川、ワーク、福岡を平均値で4～12月へ置き換え、多摩の補助金(9か月分)を入れると▲13,717千円(近似値)となります。

このままでは年間剰余予算達成どころか1円でも剰余にすることさえ難しい状況です。公益財団法人ソーシャルサービス協会は3期連続の赤字で推移しています。2017年度はなんとしても黒字決算が求められています。4期連続の赤字が避けられない所に追い込まれています。その為には、いま一度、未収金の計上、予定している業務を確実に確保することなど、収入増につながる努力をすること。支出はあらためて全項目見直しをして、無駄がないか点検していただくことです。次年度に回せるものは見合わせることで。



所長紹介 多摩支所 飛岡孝義さん

「原発による被害は人々の希望を奪う」

「夏草や兵どもが夢のあと」を「枯草や弱きども夢破れ」(飛岡孝義)と詠みたくなるような、脱原発バスツアーで訪れた時の「大平山公園の丘」から海を眺めた時の風景であった。

6年前に福島と宮城の震災地見学を行った。宮城県名取市閑上に行ったときは、水に浸かった車が膨大に積み上げられ、家屋などを奪い去った津波の破壊力を強く感じ、茫然と立ち尽くしてしまったことを今でも忘れることが出来ない。しかし、昨年10月再び閑上に行った時は、道路も市場も作られ、家屋も再建され人々の生活の営みが始まっていた。セネコンに利益を吸い取られていると思うところもあったが、復興の息吹を感じ取る事が出来たのである。

ところが、福島の大平山公園の丘には、新しい墓が沢山立ち並び海に向かっていった。そして、「大平山公園の丘」のすぐ下から海までは何もなく殺伐とした光景が拡がり、ただただ空しさと怒りを覚えた。この地域は人が立ち入ってはいけない土地となっていた。目に見えなく臭いもない放射能がこの地域の空間を覆っているのである。昨年10月には、宮城県岩沼市の「千年の希望の丘」を訪れる機会もあった。高さ4m、広さ約2,000㎡の造成した丘であり、その中に15mほどの高さの高台が6基あった。その高台の13mのところ津波が押し寄せた高さの印があった。15mの高台からは海が良く見えた。そして、同時に沢山の植樹が見えた。約4,500人のボランティアが植えたものだそうだ。

この丘は、津波の力の減衰や避難場所として活用するとともに、再生可能な震災廃棄物を利用した築造により、大津波の痕跡や被災者の思いを後世に伝えるために作ったものだそうだ。多くの人々の手によって作られた丘、それは「希望」そのものだった。それに反して、「大平山公園の丘」は「希望のない怒りの丘」とでも言おうか。津波の被害は大きいけれど再生出来る、地域の復興もできる。原発の被害は再生できない。地域の復興も出来ない。原発の被害はあってはならないものだ。(飛岡)